

2. 第1ゾーン、古墳時代・飛鳥時代と国際交流

ここ第1ゾーンでは、のちに聖徳太子と呼ばれる厩戸皇子（うまやどのみこ）らが活躍した古墳時代後期の6世紀から飛鳥時代の7世紀のようすを紹介し
ます。

古墳時代、特に5世紀以降、大王たちは海外にも目を向け、朝鮮半島や中国の国々と交流をもちました。金属加工や焼き物の技術、政治の制度や文字など、様々な新しい技術や文化を取り入れ、朝鮮半島や中国の国々と肩を並べる国づくりに、まい進しました。乗馬の風習によって馬具が登場し、刀や剣に文字が刻まれることもありました。左側の展示ケースにみられるように近つ飛鳥風土記の丘の一須賀古墳群からは、朝鮮半島との交流を示すものが数多く出土しています。

6世紀末から7世紀になると蘇我氏や聖徳太子らは、朝鮮半島から伝わった仏教を取り入れ、各地に寺院が建てられました。また、文字の普及は、情報を伝え、記録に活かされ、法律にのっとった国づくりを加速させました。聖徳太子が葬られたと考えられる石室や聖徳太子が建てたと言われる四天王寺の模型を展示しています。

7世紀になると日本の古墳を代表した前方後円墳がつくられなくなり、古墳の規模も小さくなります。また、8世紀には仏教の浸透により火葬も導入されました。こうした変化は、日本の社会の大きな変化を表しているのです。